

戦争の悲惨さ/岡大医学部の先輩のこと

帚木蓬生の作品に、「蠅の帝国」、「蛍の航跡」(新潮文庫)がある。この2冊の本の副題は、「軍医たちの黙示録」となっていて、第2次世界大戦に従軍した30人の軍医の話である。

国内、満州、支那、仏印、南太平洋、あるいは、洋上戦艦での軍医の体験をもとにした小説である。心温まる作品もあるが、ほとんどは敗戦に向かう日本軍が経験した、マラリア、赤痢などの伝染病、戦傷、栄養失調、武器不足などの惨状が、きわめて客観的に描かれている。

著者は「あとがき」で、「戦争の実相とは、つまるところ、傷つきながら地を這う将兵と逃げまどう住民、そして累々と横たわる屍ではないのだろうか。軍医はその前で立ちすくみ、そして医療に死力をふりしぼりながら、ついには将兵や住民と運命を共にしたのだ」と述べている。

小説に登場する30人の軍医の内、3人が岡大学医学部の卒業生である。以下にその3人のことが記された小説の表題と3人の概略を述べたい。

- 1) 「土龍」：^{もぐら}昭和 18 年 11 月に戸山の陸軍軍医学校卒（岡大医学部の卒業はこれ以前になるが不明）。12 月、北支に出征。昭和 19 年 7 月沖繩へ転戦。終戦時、嘉手納捕虜収容所。学生時代に乗馬クラブ。
- 2) 「戦犯」：昭和 16 年 12 月、岡大医学部卒、海軍軍医、インドネシアへ。戦犯にされ、昭和 31 年 8 月に巢鴨プリズンを出る。
- 3) 「死産」：昭和 17 年 12 月、岡大付属医専卒。インパール作戦に参加。生死不明。

先輩の方々がどなたか鶴翔会の妹尾事務局長さんのご協力で少し調べたがわからなかった。先輩の方々はすでに亡くなられておられるであろう。ご冥福をお祈りしたい。(2020-2-28)